

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：27103

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02134

研究課題名（和文）炭鉱労働の編成における民族・ジェンダー・階級の相関に関する歴史社会学的研究

研究課題名（英文）The Social History of Modern Coal Miners in Kyushu and Hokkaido:  
Intersectionality Structure of Ethnicity, Gender and Class

研究代表者

徐 阿貴（SEO, AKWI）

福岡女子大学・国際文理学部・准教授

研究者番号：90447566

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：明治以降日本の炭鉱は帝国の拡大とともに、社会の周辺に位置付けられ差異化された人々を段階的に吸収することで発展した。本研究では、技術革新や国際的労働基準、地域社会等の文脈を考慮しつつ、日本資本主義発展の動力源としての炭鉱における労働編成において発動された、人種、ジェンダー、階級が相互に作用する力学を明らかにした。主として歴史社会学の手法を用い、植民地/国内植民地論、フェミニスト政治経済、国際労働移動論等に依拠して検討した。具体的には、九州の筑豊炭鉱の朝鮮人および女坑夫、および北海道幌内炭鉱の囚人労働を事例とし、労働管理、炭鉱関連の政策や世論、炭鉱労働者の認識と体験、の局面から考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

差異化の相関（intersectionality）という、西欧の労働研究では標準になっている分析視点を援用することで、日本の炭鉱研究の発展に寄与する。第一に、炭鉱労働に従事する多様な社会的カテゴリーの相互関係を明らかにした。第二に、炭鉱労働における身体規律の考察から、「未熟練ゆえに低廉」とされる労働力および身分の形成について、戦前からの連続性と非連続性を通時的に捉える視野を提示し、現代日本における身分的な労働編成について歴史的な角度から知見を提供した。

研究成果の概要（英文）：Coal mines were a major driving force of Japan's industrialization along with the expansion of the Japanese Empire. The coal mines have developed by absorbing people who were positioned on the periphery of the Empire and differentiated in terms of class, gender and race. This study focuses on the various dynamics of differentiation invoked in the process of labor reorganization in the coal mines, taking into account the context of technological innovation, international labor standards, and local communities. Applying global history, postcolonial studies and feminist economics as analytical framework, we examined the cases of Korean and female miners in Chikuhō coal fields in Northern Kyushu, and prisoners in the Horonai coal mine in Hokkaido on the following aspects: (1) coal mine labor structure and management, (2) coal mine-related policies and public opinion, and (3) coal mine workers' perceptions and experiences.

研究分野：社会学

キーワード：炭鉱 集治監 植民地 ジェンダー 囚人 労働編成 衛生 朝鮮人

## 1. 研究開始当初の背景

日本は帝国下での産業革命の進展にともない、石炭の需要が大幅に増加した。近代資本主義の発展にこたえるべく、炭鉱開発が大規模に行われたが、相対的に労働条件が劣る炭鉱、とりわけ危険がともなう坑内労働は一般に忌避される就労分野であり、恒常的な労働力不足にあった。そして炭鉱での労働力確保は、待遇改善よりも企業募集や国家的強制も含む、あらゆる形の動員と配置を通じ行われる傾向にあった。没落農民その他の貧困層、被差別部落出身者、囚人、さらに植民地出身者や、戦時には捕虜というように、炭鉱労働は帝国拡大によりあらたに作り出される「周辺」部分に転嫁されるようになった。炭鉱労働は、帝国による植民地支配と総力戦を通じて拡大し、敗戦、戦後のエネルギー革命による閉山をもって終結したとされる。

このような経過をたどった炭鉱労働に関する先行研究は、おもに以下の3つに大別される。まず、社会経済史や経営学的な関心に基づく、経営側の労務管理を分析対象とする研究が数多く蓄積されてきた。第2に、炭鉱に従事する鉱夫・坑夫・鉱員に関し、労働市場における需給状況のみならず、社会的ヒエラルキーとの関係から行われてきた調査研究として、囚人を行使する集治監や、戦時下の政府計画に基づく朝鮮人労働動員に関する調査研究が行われてきた。以上の先行研究のほとんどが男性の炭鉱夫に焦点をあてており、それは実際に炭鉱労働の基幹部分を男性が占めてきたことによるが、近年は、女性の炭鉱労働者に光を当てた研究も相次いでいる。

社会経済史、労働史、ジェンダー史、監獄研究やポストコロナ研究などにおいて、帝国主義と一体となって急速に発展した炭鉱の労働構造、その採炭の機械化・合理化による変容過程が、政策や行政文書、企業文書の分析から明らかにされてきた。そして、労働編成や労務管理において、民族やジェンダー、階級 - それ自体、帝国拡張と資本主義化を通じ構築されてきたがどのように構造化されたのか、差異化・他者化・周辺化された人々が、帝国臣民間の序列を規定する法制度によって、どのように炭鉱労働に吸収されたかが解明されてきた。しかしながら従来の研究では、囚人、植民地出身者、あるいは女性など、帝国内で周辺化された特定のカテゴリーに焦点をあてた研究が多い。例外的に、戦間期における女性と朝鮮人による炭鉱労働を分析したいくつかの研究(西成田豊、佐川亮平)は、国際労働法規や採炭合理化といった要因による影響を分析している。しかし炭鉱の労働編成に関する、民族やジェンダー、階級など複数の分析軸による研究は、とくにそれらが相関する複雑なメカニズムについて、より深められる必要がある。

## 2. 研究の目的

以上の問題意識から、本研究は、炭鉱の労働編成において、ジェンダー、民族(日本人、植民地出身者)、階級(部落出身者、囚人)が構築され相関する諸相を、歴史社会学の視角から実証的に解明することを目的とする。炭鉱労働に従事した個別の社会的カテゴリー出身の人々の処遇や経験について明らかにしつつ、労働編成における民族、ジェンダー、階級の相関に焦点をあてる。帝国内で創出された周辺の労働者を吸収し発展した炭鉱における、労働過程における差異化の相互作用に焦点をあて、植民地・内国植民地論、越境の労働移動論、女性労働研究に依拠して検討する。具体的には、福岡県筑豊の朝鮮人および女坑夫、そして北海道幌内の囚人労働を事例とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、炭鉱労働の編成過程に焦点をあて、歴史社会学的手法により、民族、ジェンダー、階級による差異と分断の構築変容を検討した。具体的には、九州筑豊地方の炭鉱および北海道幌内炭鉱を事例とし、労働構造および労務生活管理、関連する政策、世論の動向、炭鉱労働者の認識と体験(および記憶化)の3つの局面について、行政機構や企業、企業団体による史料や機関紙等の一次資料、およびルポルタージュ等として残された2次資料に基づき、分析検討を行った。なお戦時期の筑豊を知る人物から炭鉱労働および生活について聞き取りを行っていたが、2020年3月以降のCovid-19による行動規制により中断された。このため当初の計画を大幅に変更し、史料分析を中心とする研究となった。

## 4. 研究成果

### (1) 筑豊における朝鮮人および女坑夫について

福岡や佐賀の炭鉱では、過酷で危険な坑内労働に、男性と同じく女性も基幹的労働力として従事していたことが知られている。一先体制と呼ばれる、石炭を採掘する先山(男性)と、掘り出された石炭を運搬する後山(女性)による、夫婦や家族を単位とするジェンダー分業による石炭生産が行われていた。1928年坑夫労役扶助規則改正により女性の坑内労働が禁止され、ほぼ同時期に朝鮮人坑夫が増加した。しかし、女坑夫が行っていた役割を朝鮮人が代替したのではなく、技術革新による作業の集団化と合理化という大変革を要因とする、坑夫の男性化という質的変

化として説明されてきた。坑内から排除された元女坑夫は、賃金が低い地上労働に従事するほかに、妻役割として、おもに家庭生活を維持する責任を負うこととなった。ただし小資本の炭鉱では機械の導入は難しく、合理化が進展しなかったため、坑内労働からの女性の完全な撤退は先延ばしされた。

戦時においては徴兵により熟練男性鉱夫が極度に不足し、他方で石炭の増産圧力は高まった。労務動員により福岡県内の炭鉱に約 10 万 5 千人の朝鮮人が配置され、全炭鉱労働者の 4 分の 1 を占めるに至った。国家権力により統制された集団移入による朝鮮人の、炭鉱での扱いに関し、中小炭鉱の組合機関紙に寄せられた記事や手記をもとに分析を行った。出身地において大部分が農業に従事していた朝鮮人は炭鉱労働者として未熟練であった。石炭増産に邁進させるにあたり、苛烈な暴力が加えられたり、劣悪な労働環境によって多くの犠牲者が生じたことが知られている。言語や生活様式その他、背格好や身体の動かし方、食事など肉体的要素に関わり、朝鮮人を客体とする描写の数々は、能力の低さ、あるいは逆に期待以上の能力の持ち主など極端な評価をされた。労務管理者や経営者、行政官による朝鮮人坑夫の表象は、常に「日本人」が臣民の標準モデルとして参照され、人種的他者として「朝鮮人」が構築される過程を示していた。他方で、戦争遂行のため女性の合法的坑内労働が復活し、戦争末期に近づくほど女性への依存が高まった。再び地下に降りることとなった元女坑夫は熟練者であったが、いったん家庭領域と結びつけられた女性たちは、坑夫というより「銃後を守る」妻として扱われた。総力戦下の炭鉱労働の再編過程における人種化とジェンダー化のプロセスを検証しつつ、それらの交差に関しては十分に跡付けるには至らず、今後の課題とした。

## (2) 北海道の炭鉱における囚人労働について

明治政府による集治監と、日本資本主義を支えた鉱山・炭鉱王制の関わりを、北海道を中心に研究を行った。北海道の「植民化」を進めるにあたり、明治政府は集治監を 5 つ建設し、内地から囚人を強制的に送り込んだ。集治監には男性のみが収監され、強制的に移動させられ、外役という監獄作業を通じて土地の開墾、道路建設、そして炭鉱労働等に従事した。監獄内の作業と交差するカテゴリー、つまり「外・内役」、「強・軽役・病」、「男・女」といったカテゴリーに注目し、監獄内にどのような規範を生み出していったのかを考察した。北海道は囚人労働のうち外役が全体の 60～70% と高い割合を占めた。1883 年に設置された空知集治監から囚人が出役した幌内炭鉱では、出炭量は、囚人が入る前と比べて 4 倍を記録するほどであった。

北海道に関する調査や資料によると、作業の強度により、食事の主食の量、作業時間、衣服、入浴時間などが細かく規定された。こうした規定から、監獄作業（外役、内役、内役の種類）を通じて、どのような身体が労働可能な身体であるかを規定し、また、どの作業がふさわしく、主食をどの程度摂取するのが適当なのか、そして身体規範・ジェンダー・規範・衛生規範を構築していったことが見えてきた。規定を通じて、「労働」できる、また衛生・健康的な身体を定義すると同時に、それ以外に対して差異を生み出しながら、身体・ジェンダー・衛生規範を構築していった。明治社会全体においても国家科学が身体を統治し、労働・生産性を管理する重要なシステムが構築されていった。

その中で監獄医は、明治転換期に「官吏」として新たに誕生した。囚人の身体を労働できる・できない身体として選別し、囚人の健康、労働力を維持させ、病は規範を維持するためだけでなく、労働から排除される力を持つ。監獄医の職務を論じる記事から、科学の知識を得た医師たちによる権力が確立され、監獄内において、明治の衛生論を実施する主体とみなすことが可能である。監獄医は囚人労働・作業と病の因果関係を調査し、労働の廃止や衛生改善を推し進める科学的な主体であった。

## (3) 敗戦による帝国崩壊、さらにエネルギー革命による国内炭鉱の衰退から、炭鉱労働、とくに囚人や植民地出身者の強制労働は過ぎ去った過去、あるいは戦争という異常時の例外的出来事とされがちである。しかし世界的資本主義システムは継続し、グローバル経済として進展している。囚人、植民地出身者、女性等の差異化された帝国臣民を巧みに取り込んだかつての炭鉱労働は、現代日本社会の問題、すなわち人手不足に陥った産業維持のため、待遇改善ではなく、女性や外国人を「高学歴日本人男性」を標準とする労働者モデルから逸脱した存在として労働力化し、低廉で柔軟な補充人材とすることで乗り切ろうとする現状と重なっているのではないか。この点は、すでに国際労働移動研究によって指摘されているが、「未熟練で低廉な労働力」の形成、導入と管理様式の連続性と非連続性を通時的に捉える視座を、炭鉱労働に関する実証研究を通じて提起したい。

他方で、明治期の集治監および戦時労務動員という、炭鉱という場でとくに国家権力の強制が作用する労働について共同研究を進める過程で、「Confined spaces (制限された空間)」における労働、そのような空間につながれた身体に関わる規律管理へと研究関心を深めていった。そこで国際学会 ASCJ および AAS-in-Asia においては、炭鉱のほか、ハンセン病施設と遊郭という、制限された空間に結び付けられた人々の労働と生活、抵抗に焦点をあてる研究者とパネルセッションを組んだ。これら 4 つの「制限された空間」事例について、労働や生活管理を通じた身体規範の形成と実践をインターセクショナルリティの視角から分析し、囚人、植民地出身者、娼婦、ハンセン病感染者というカテゴリーの構築にどのように関与しているかを考察した。

行動の自由に制限がかかる空間 監獄や炭鉱、遊郭、ハンセン病施設 における衛生問題や病

の処置の不備は、研究期間に猛威をふるった Covid-19 においても同様であり、一般社会と区別されたこれらの空間を管理する国家の責任を問うものである。本研究の分析対象は時期的には帝国期の炭鉱労働であるものの、現代日本を帝国後の社会と捉え、その連続性を検討する必要性が喚起された。この問題意識をもとに、炭鉱、監獄、遊郭、ハンセン病施設という制限された空間における拘束的な労働と生活を、インターセクショナルリティの視角から考察する共同研究として発展させ、次の科研費研究のテーマとして取り組むこととなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 林葉子, 徐阿貴, 長谷川和美, 金貴粉, ゲイル・カーティス・アンダーソン	4. 巻 5
2. 論文標題 活動報告 学術講演会「ジェンダー化された帝国日本の周縁 インターセクショナリティの視座から」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 GRL Studies (名古屋大学ジェンダーリサーチライブラリー)	6. 最初と最後の頁 115-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.13039/501100001691	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長谷川 和美	4. 巻 59
2. 論文標題 衛生行政・囚人労働・監獄医 明治初・中期を病と囚人労働身体規範の領域から見る	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 社会科学篇 = THE NAGOYA GAKUIN DAIGAKU RONSHU; Journal of Nagoya Gakuin University; SOCIAL SCIENCES	6. 最初と最後の頁 239 ~ 252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15012/00001446	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徐阿貴	4. 巻 24
2. 論文標題 <書評> 熊本理抄著『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ジェンダー研究 : お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報	6. 最初と最後の頁 219-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24567/0002000131	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徐阿貴	4. 巻 184
2. 論文標題 福岡・西戸崎の在日朝鮮人 社宅型のエスニック・コミュニティ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 リベラシオン 人権研究ふくおか	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徐阿貴	4. 巻 795
2. 論文標題 図書紹介 熊本理沙著『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊 部落解放	6. 最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Seo, Akwi
2. 発表標題 Labor mobilization in Chikuho coal mines: Focusing on Female and Korean Miners
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan 2023 Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hasegawa, Kazumi
2. 発表標題 The Making of the Mine Monarchy, Forced Prison Labor, and the Discourse of National Hygiene in Meiji Japan
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan 2023 Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 徐阿貴
2. 発表標題 戦時労働動員における民族とジェンダー - 筑豊地方の中小炭鉱の動きから
3. 学会等名 ジェンダー化された帝国日本の終焉 - インターセクショナリティの視座から (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長谷川和美
2. 発表標題 監獄と保護に関するジェンダー分析
3. 学会等名 ジェンダー化された帝国日本の終焉－インターセクショナリティの視座から（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 徐阿貴
2. 発表標題 インターセクショナリティの視角が照射する帝国における周辺化された労働と生活
3. 学会等名 ジェンダー化された帝国日本の終焉－インターセクショナリティの視座から（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Seo, Akwi
2. 発表標題 Multiplicity of oppressions and resistance: A life story of Korean woman in Japan
3. 学会等名 2021 International Conference Social Minority and Human Rights, Institute for Human Rights and Social Development, Gyeongsang National University, Korea（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 徐阿貴
2. 発表標題 社会を映し出す鏡 在日朝鮮人女性とジェンダー
3. 学会等名 ふくおか自由学校（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川和美
2. 発表標題 戦前の監獄改良運動と病
3. 学会等名 ジェンダー史学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

徐阿貴(2024)「移住女性とフェミニズム」ジェンダー事典編集委員会編『ジェンダー事典』丸善出版、pp. 302-303.  
 徐阿貴(2023)「在日朝鮮人」日本平和学会編『平和学事典』丸善出版、pp.202-203.

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長谷川 和美  (HASEGAWA KAZUMI)  (90826562)	名古屋学院大学・外国語学部・講師    (33912)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------